サポート・ご協力　ありがとうございます

■平成21年度会員（敬称略・順不同、２００９年１０月１日～１１月３０日）

（正会員）
（特）ネットワークオレンジ、（特）起業支援ネット、（特）グループゆう、アップル環境ネットワーク、（特）ちば市民活動市民事業サポートクラブ、有地和子、大須智栄、白木福次郎

（準会員）
（有）平野印刷所、杉山芙由、食育ＮＰＯ「おむすび」、（特）ＷＡＣまごころサービスみやぎ、須藤達也、上野和弘

■企業・団体協力（50音順、敬称略）
岡元タイル（事務局スペースを社会貢献価格にて）、富士ゼロックス宮城（株）（カラーコピー機を社会貢献価格にて）

「ケアする人のケア」セミナー
～家族の「労苦」と「いたみ」を支える～

参加費無料

このセミナーでは「労苦」と「いたみ」を支える政策形成や市民活動のありかた、生命に寄り添う看護や福祉の実践など、様々な観点からケアする家族を支える社会をどのように作っていくかを議論します。

日　時：2010年2月3日（水）9時50分～16時（受付9時半～）
会　場：エル・パーク仙台ギャラリーホール
対象者：福祉医療従事者、NPO・ボランティア団体職員、研究者、介護家族、コミュニティケアに関心のある方
申　込：当センターまでお電話ください。
定　員：200名（先着順）
主　催：（財）住友生命社会福祉事業団／（財）たんぽぽの家
協　力：（特活）せんだい・みやぎNPOセンター
詳　細：当センターHPからご覧いただけます。

加藤哲夫のNPO経営相談

開 催 日：平成22年1月19日（火）
　　平成22年2月23日（火）
開催時間：13:00～16:00
場　　所：せんだい・みやぎNPOセンター
相 談 料：2,500円（1時間単位、会員は500円引き）
※予約制です。まずはお電話を。

せんだい・みやぎNPOセンター主催
「大！新年会＋プロペラトークス」

2009年大好評を頂きました、当センターの大新年会。2010年は、トークライブ「プロペラトークス」と合同開催と致します！トータルコンセプトは「いのち」。2009年に引き続き、新しい年も「いのち」を紡いで参ります。NPO関係者、行政、企業をつなぐ大新年会、お友達お誘いあわせの上お越しください。スタッフ一同心よりお待ち申し上げております。

日　時：2010年1月13日（水）19時～21時（開場18時45分）
会　場：仙台市市民活動サポートセンター地下シアター
参加費：2500円（当日受付にてお支払下さい。）
定　員：60名（NPO、企業、行政、一般の皆さま）
申　込：当センター宛て、電話でお申し込み下さい。
詳　細：当センターHPやブログをご覧下さい。
　　そちらからも申込可能です。
締　切：2010年1月8日（金）
　　定員になり次第締めきらせて頂きます。
※食べ物、飲み物のさし入れ大歓迎感謝です♪

編集後記

みんみん2009年一番初めの編集後記にこう書いた。「今年は12年に1度のラッキー年らしい。」振り返って、今。果たしてそんなに大それた年だっただろうか？それが実際に判明するのは、この世にサヨナラを言う時かもしれない。そして、12年に1度のラッキーを過ぎたら、今度（年）はどうなるのだろう？などと思いながら、また新たな気持ちで日々暮らして行こうと思う。
（OGAWA M）

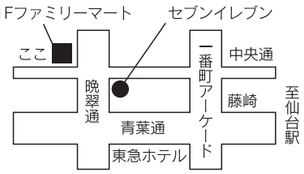
NPOと関わって2010年6月で丸15年になります。その間に、だんだんNPOであるとか企業であるとか、区別する意味があまりないように思えてきました。簡単に言うと、人としてあるいは組織体として、社会にどのようにお役にたちたいか、お役にたっているかということではないかと。最近ちまたでは、社会起業家とかソーシャルビジネスとかいう言葉が人気です。わたしも、実はボランティアや市民運動とかいう言葉より「NPO」というほうがカッコいいなと思って、関わり始めました。言葉のイメージって大切です。でも、かっこよさだけでは長続きしません。社会を良くする、社会を変えるという志を政治家じゃやなくても、実践できる手ごたえとか面白さを実感できるこの仕事って、お金に換えられない価値があると思います。（べにむら）

連絡先

特定非営利活動法人　せんだい・みやぎNPOセンター
〒980－0804　仙台市青葉区大町2－6－27　岡元ビル4F
TEL：022－264－1281　FAX：022－264－1209
E-mail：minmin@minmin.org　HP：http://www.minmin.org/

発行：（特活）せんだい・みやぎNPOセンター

代表理事　大滝精一・加藤哲夫
編集部：小川真美・紅邑晶子
発行日：2010年1月1日
デザイン：氏家朗



岡元ビル4F　仙台駅から徒歩20～25分

NPO法人認証団体数　｜　宮城県　587団体　2009/11/16現在　｜　全国　38,614団体　2009/10/31現在（内閣府）

2010年1月1日　Vol.67

みみんん

【題字】谷川俊太郎さん

MY FAVORITE　お気に入り小物拝見

理事対談にご登場いただいた、株式会社セレクティー代表取締役畠山明さんのお気に入り小物は、社員の方々から２００７年、会社設立11周年の際に頂いたワイン。実は、会社設立日と畠山さんの誕生日が11月12日と一緒のため、社員の方が毎年プレゼントを送ってくれるそうです。贈り物は年によって違うそうですが「このワインは、もったいなくて飲めないんですよ」と畠山さん。社員の皆さんを大切にする、畠山さんらしいお気に入り小物です。

■目次

P2～3　理事対談 株式会社セレクティー代表取締役 畠山明氏／代表理事 大滝精一
P4～5　せんだい・みやぎNPOセンターの事業から（2009年10月―11月）
P5……　ちょっとかじってみよう！CSR
P6……　2010年を迎えて
　～せんだい・みやぎNPOセンター今後の抱負～ 代表理事 加藤哲夫
　公益ポータル・推進プロジェクト全国会議
P7……　らんち de MATCH♪
P8……　新規会員・継続会員、編集後記、お知らせ、連絡先等

理事対談
トップ同士ではなく現場レベルでの連携を

今回の理事対談は、仙台で家庭教師派遣や塾を経営している株式会社セレクティー代表取締役畠山明さんと当センターの大滝精一代表理事に、企業のCSR活動・NPOとの協働について語っていただきました。

■発達障害のお子さんの受け入れ

大滝：今日は、企業のCSR活動について話しが及ぶと思いますが、まず畠山さんの会社の事業内容と、どんな想いをもって活動をしているか教えてください。

畠山：株式会社セレクティーは、1996年に設立しました。事業としては、「家庭教師のアップル」「個別教室のアップル」「人材派遣のアップル」を行っています。私は、もともと小学校教師でした。その時、集団の授業についていけない子が居ましたが、集団授業ではどうすることもできず、そんな子どもを1対1でフォローしたいと思い会社を設立しました。

経営面では勉強不足だったので、最初は苦労しました。設立当初は、自宅への講師派遣からスタートし、その後学習塾の教室を開くようになりました。教室でも、１対１の個別指導という形をとっています。また、学校への講師派遣も行なっています。

大滝：「家庭教師のアップル」では、発達障害のお子さんへの授業を行っていますよね。きっかけは何だったんですか？

畠山：学習支援を行う中で、同じように教えているのに他の子どもより勉強が身に付かない子や、数学は出来るのに英語は全く身に付かない子がいることに気付いたんです。その時は、発達障害の事は知りませんでした。その後、そういった症状は発達障害が原因の可能性がある事を知り、講師の中からも「発達障害について勉強したい」という意見が出てくるようになりました。講師の中に、（特活）自閉症ピアリンクセンター「ここねっと」（以下、ここねっと）の知り合いの者がいたので、まず「話を聞いてみよう」ということになり、勉強会を開くようになりました。勉強会を行うようになり、講師からも「なぜ子どもたちが分からないのか理解できるようになってきた」という声が聞こえてきました。そこで発達障害についての基礎コース、マスターコースを設け、希望した講師が受けられるようにしています。保護者の中から「学校の先生よりも子どものことを分かってくれる」と言われることもあります。収益には結びつかないけれど、今後も持続して取り組んでいきたいと考えています。今は講師向けに発達障害の勉強会を開いていますが、保護者向けの発達障害についての勉強会も行っていけたらいいなと考えています。

大滝：発達障害の生徒に対応する講師は、どうやって決めているんですか。

畠山：講師は、基礎コース、マスターコースを受講することになっていて、コースを終了後、「発達障害の子にも教えてみないか？」とこちらから打診をしています。難しいのですが、中途半端な知識で「発達障害の事を理解している」と勘違いし、実際生徒さんと対面した途端へこたれてしまう人もいるんです。ですので、話し合いをして、マスターコースを受講終了していなくても、私達がフィットしていると思う講師をご紹介する事もあります。そのほうが相性が合い、授業もうまくいくことが多くありました。今までは、ここねっとにお願いして講座を開催してきましたが、将来的には自分たちでも講座を開催できるようになりたいと考えています。それにより、障害のあるなしに関わらず、「苦手科目を伸ばしたい」という多くのアップル会員への支援技術と、事務局機能の向上にもつながります。

■CSRではなく企業理念の延長として

大滝：お話を聞いていて、会社の理念として「１対１の個別指導」という考え方の延長線上に、今の取り組みがあるなと感じました。しかし、発達障害の子どもに対して、個別に勉強を教えていくのは手間がかかると思いますが、講師の皆さんはどういう反応ですか？

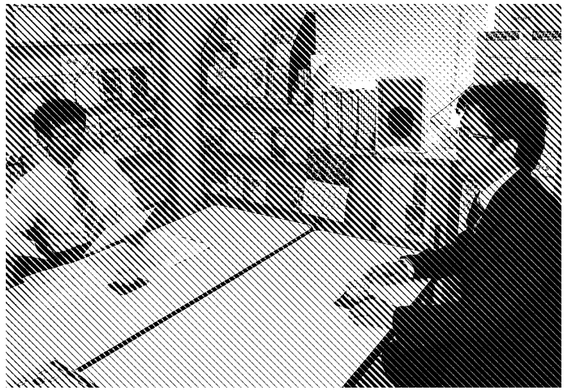
畠山：講師には負担になっていると感じることもあります。発達障害のお子さんを抱えたご両親も心的負担を抱えていることも多く、そのため保護者の方からクレームを言われることもあります。家庭教師なので、自宅に行く事もあり講師はそういった場面に出くわす事もあるようです。

大滝：会社として、発達障害のある子どもさんに教える取り組みは社会貢献の一環だと考えていますか？

畠山：それはあまり考えていません。発達障害のあるお子さんだけに教えている訳ではないですし、発達障害のあるお子さんに教えるためのいろいろな工夫は、他の子どもさんに教える時にも同様に効果的な場合があります。スタッフの中では「特別支援教育士」の資格所得を進めています。社会貢献というよりは、CRSの一環で、スタッフの勉強だと考えて続けて行こうと思っています。

大滝：「ここねっと」と連携しているというお話が出てきましたが、具体的にはどんな取り組みをしていますか？

畠山：発達障害は個人によって、症状の内容も程度も違ってきます。私たちは医師ではないので、症状の全てを正確に理解できる訳ではありません。なので、私たちは発達障害のお子さんの学習支援



に特化していこうと考えています。それ以外の部分は、医師や、「ここねっと」と連携していこうと思っています。

大滝：極端な話になってしまいますが、ノーベル賞を受賞した人でも発達障害がある人が居ますよね。発達障害がある子どもの、良い面を上手く引き出す努力が必要ですね。

畠山：一人ひとりの良さを上手く引き出せたら、すごい才能を発揮できると考えています。むしろ配慮していかなければならないことは、２次障害。周りの理解が得られずに不登校や反社会的行為にいたってしまうケースもあるようです。発達障害への理解は、広く伝わってほしいと思っています。発達障害は、程度の違いはありますが、約６％の人がその可能性があると推計されています。

■トップ対トップではなく現場でのやり取りを

大滝：今後の展望を教えてください。

畠山：自社の研修制度を整えてさらに教師の質と事務局機能を高めていきたいです。また、将来的に公益団体を作りたいと考えています。そこをプラットフォームにしてNPO、行政、医療機関の方々と連携し、いろいろな方から子どもたちへの支援が得られるような場所を作っていけたらいいなと考えています。

紅邑：NPOとの関わりで何か意識をしたことはありますか？

畠山：NPOの方は熱意が素晴らしいです。私たち企業にそういった事を教えて欲しいし、活動を継続的に続けて頂きたいと思っています。逆に質問ですが、その想いが10年20年経ってくる中で、団体として続かない事はあるんですか？

紅邑：NPOはミッション達成により解散したり、考え方の違いによって会が別れる事もあります。そういった所は、企業と同じですね。

大滝：社会で起こっている問題の先端を捉え続け、追いかけていくのは大変。ルーティーンの作業に捕われてしまったり、問題を見つけ続けていく力がないこともある。全てのNPOが、展開力や運営力があるわけではないので難しいですね

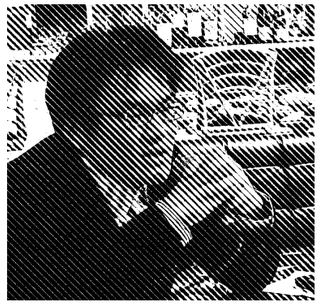
畠山：一緒に活動している「ここねっと」と連携をしていて、当然生じるお互いの良さや違いを認識し、良い距離感を保ちつつ、効果をもたらそうとするには、お互いに努力が必要です。しかし、すぐにはできないことだと思いました。それがうまくできれば、たとえ時間が経過しメンバーやトップが変わっても同じ話ができ、良い関係を継続できるとも感じました。

大滝：この問題は、NPOと企業がコラボレートする時の問題点だと思います。最初は、トップ同士が話し合い事業を理解しあって始める。しかし、時間が経てば時代も問題も変わる。本当は、現場同士がやり取りして活動が進むのが理想。そのためには、現場の人に「発達障害の子どもをなぜ預かるのか」、その理念が伝わっていなくてはならないですね。今日は、どうもありがとうございました。「記録・編集・内川奈津子」

ゲスト
畠山　明さん
株式会社セレクティー　代表取締役
せんだい・みやぎNPOセンター　評議員

大滝精一さん
東北大学大学院経済学研究科教授
せんだい・みやぎNPOセンター　代表理事

プロペラトークスVol.4



１１月１９日（木）、仙台市内のカフェ＆バー「Waterr」さんにて開催されたプロペラトークスのゲストは特定非営利活動法人POSSE（以下POSSE）代表の今野晴貴さん。この会のためにご多忙中の中、わざわざ東京からお越し頂きました。

POSSEは若者の雇用問題に取り組む東京の団体で、こちら仙台でも仙台POSSEを立ち上げ、精力的に活動していらっしゃいます。２０代から３０代の若手会員約１６０名を率いる今野代表からどんなお話がうかがえるのかと、１０数名の皆さんが集まって下さいました。

■職が無いよりマシだから

「家計自立型非正規雇用」ということばをご存じですか。大黒柱として家計を支える役割を担っていながら、パートや派遣といった非正規な形の雇用状態を指し、我が国では９０年代以降、大量に生み出されたそうです。どんなに劣悪な労働条件だとしても、仕事が無いよりはマシと、使い捨てのコマのように扱われる労働者。予想通りではありましたが、今回そんな頭を抱える話題からスタートしました。生きるためには働かねばなりませんが、働きすぎると肉体的にも身体的にも病んでいく。しかし働くことを止めるわけにはいかない。どこで声をあげていいのか見当もつかない。そんな現実のお話をうかがう中で、これは社会の根源的構造から再考すべき課題なのだと思わされました。

■参加者の方々からの声

「少人数で丁寧に質問に答えて頂き良かったです。」「なかなか聞けない話を、なかなか会えない人たちと話せて貴重な時間でした。」と、今野さんのお話を楽しんで頂けた方々。「会場はどこかと探しながら来るのも楽しみの一つです。」とおっしゃる常連さんや、「こんな楽しいイベント、みんな来ればいいのに！」と嬉しいことばをかけてくださった初参加の方。

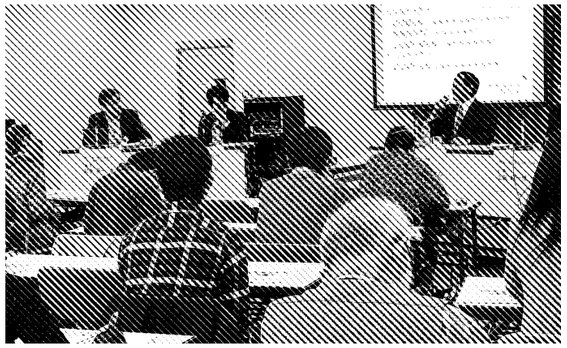
そんな皆さまとご一緒に、今野さんもトークライブ終了後、引き続き夜遅くまでおつきあいくださいました。

次回のプロペラトークスは当センター新年会と合同の形で1月13日（水）に開催予定です。詳細は最終頁をご覧下さい。

（小川真美）

サポセン１０周年大感謝祭「こんなサポセン見たことない!!」

２００９年１１月２９日（日）仙台市市民活動サポートセンターで、１０周年大感謝祭を開催しました。この企画は、開館から１０年目を迎えたサポセンと、７年目を迎えたせんだいＣＡＲＥＳ、３年目を迎えたシニア活動支援センターのタイアップというなんとも欲張りな企画で、７階建てのサポセン全館をまるごと使用して、仙台の市民活動、シニア活動を体感するさまざまなプログラムを実施しました。



■課題の深刻さ次々と…

６階、セミナーホールでは、現代の社会が抱える課題ともいえる「格差社会」をテーマに「ＮＰＯサイコロトーク」を開催しました。仙台の市民活動団体から６名のゲストをお迎えし、若者の自立や社会復帰をキーワードに、市民活動がこれから果たすべき役割について熱い議論がなされました。市民活動団体が互いに連携しながら課題解決に取り組む事例も紹介され、つながっていくことの意味や可能性を感じるトークセッションになりました。

■シニアパワー炸裂

３階、仙台市シニア活動支援センターの「シニア活動蚤の市」では、協力団体や個人の方が日頃の活動の成果を盛大に発表しました。会場のアチラコチラで新しい出会いやコラボ企画のアイデアが生まれ、これからますます面白いことが起こる予感です。

■こんなサポセン見たことない!!

１階、情報サロンでは、１日限りのＣＡＲＥＳ　Ｃａｆｅがオープン。非営利ロハス楽団「ＪＵＭＰＩＮＧ　ＣＲＯＷ」によるバンド演奏や東日本放送のマスコット「ぐりり」登場に、来館された皆さんもびっくり！普段とは違うサポセンをお楽しみいただきました。また、地下の市民活動シアターでは、ＮＰＯのプロモーションビデオ上映会を実施。ＮＰＯの情報発信として、今後は動画も注目です。

（小松　州子）

CARESプロモ発表

せんだいメディアテークスタジオ・ラボとせんだいCARESのコラボレーション企画として、市民がプロのアドバイスを受けながらＮＰＯのプロモーションビデオ（PV）制作に挑戦するというプロジェクトを実施しました。

■NPOもプロモーションビデオをつくる時代です。

PVを制作したのは２団体。あらゆるセクシャリティ（性的指向）の人が尊重されることをめざして仙台を中心に活動しているグループ「Anego」と、障害のある人もない人も共に働く場で、美味しいパンとクッキーを作っている「コッペ」。ここは、（特活）麦の会が運営しています。

今回制作したのは一般の市民。多少映像の知識はあるもののプロではありません。全体の構成や、どのように見せるか、ナレーション、音楽など、アドバイザーであるCATVの日高さんや、せんだいメディアテークのスタジオ・ラボ担当スタッフも入り、絵コンテなどを見ながら相談しつつ進めていきました。

■仙台市市民活動サポートセンター10周年大感謝祭での発表会

そして11月29日に行われたせんだいCARES共催の仙台市市民活動サポートセンター10周年大感謝祭では、地下１Ｆの市民活動シアターにて今回制作したＰＶを上映しました。会場にはこれを目当てに来てくれた方や、ふらっと来た方、そしてＰＶの団体のスタッフなどが来ていました。ＰＶを見て、団体の方も、予想以上の出来に大満足だったようです。Ａｎｅｇｏ代表の宮城さんは、「今回ＰＶを作っていただいたことで、団体の中でも新たな発見があったり、今後やるべき課題も見えてきた」とコメント。麦の会は、会場に来ていた麦の会スタッフに「今回のＰＶを見てどう思ったか」という質問を投げかけたところ、ひとりのスタッフから「仲間っていいなと思いました」とのコメントが。その瞬間会場がとても暖かい空気で包まれました。

今回制作したＰＶは来ていただいたみなさまに無料で配布されました。今は団体のＰＲも、多種多様になってきています。今後いろんな場面でこのＰＶがお役にたてればいいなと思っています。

（田内亜紀子）

チョット かじってみよう！CSR。9

「CSR推進相談所・繁盛記」

「企業のパートナーにたるNPOとは？」

11月10日（火）・11日（水）に開催された、「NPO活動推進フォーラムinやまがた」。今回のこのフォーラムの特徴は、これまでテーマとして取り上げられなかった「企業」との協働も含むというものでした。

1日目のIIHOE[人と組織と地球のための国際研究所]代表・川北秀人さんの基調講演のタイトルも「企業・自治体とNPOとの協働は、どう進んだか、どう進めるのか」というもの。そこで、川北さんは「企業のCSRはイコール社会貢献ではなく、企業に利益が出ようが出まいが必要なもの。すべての企業が持続した活動を行っていくために取り組まなければならない責任である。」と話していました。続いて行われたパネルディスカッションでも、「実は企業もNPOとつながりたがっている」といった発言がありました。「企業は社会的投資として地域や次世代育成に取り組むべきである。」「企業の持っている資源と地域のニーズがなかなか結びつきにくいなか、それをつなぐコーディネーター役として、中間支援組織が重要である。」、といった話が活発に展開されました。

わたしは、2日目の分科会３「企業の社会貢献と行政、NPOとのパートナーシップ」のコーディネーターを担当しました。ここでの事例発表やパネルディスカッション、グループワークを通して見えてきたことは、お互いの文化の違いがあることを前提とした、共通の言語を学びあう場・出会いの場が必要ということでした。そのためには、「防災」とか「子育て」というような共通する地域課題のテーマを見つけて、それを切り口にして一歩目を踏み出せるのではというような意見が交わされました。また、行政も企業もNPOは果たして信頼に足る団体かということが一番気にかかるということも、再認識されました。そのためにもNPOの積極的な情報開示が必要であり、ブログやメルマガなどの活用が大事であるということですね。（相談所所長：紅邑晶子）

「2010年を迎えて～せんだい・みやぎNPOセンター 今後の抱負～」 代表理事 加藤 哲夫

せんだい・みやぎNPOセンター(以下センター)は、この2009年11月1日で、設立から12年になります。以来、毎年毎年、新しい事業に取り組み、組織も拡大してきました。それは、創設期から発展期における懸命の努力であったと思います。

10周年を迎えたあたりから、センターの事業計画に変化が現れます。テーマの一つは、各事業間の連携促進でした。たくさんの自主事業、受託事業を展開しているのですが、各々バラバラになっていて、相乗効果が乏しいという課題があり、事業間連携がテーマになったものです。もう一つは、センター単独の事業実施から他組織他機関との協働・連携による事業展開です。そして最後のテーマは、組織内人材の育成から地域人材育成システム構築です。いずれのテーマも、何か直接的な新規事業の開発などと違い、ついつい後回しにしてしまうような、ある意味で内向きのものです。なかなか成果も見えにくいし、毎年の事業報告でも歯切れの悪い評価が多かったと思います。

その間にもセンターは、受託施設が増え、自主事業と受託事業の連携も大きなテーマになりつつありました。その中で、地道に続けてきた情報開示支援サイト「NPO情報ライブラリー」は、日本財団CANPANと連携して、地域公益ポータルサイトを生み、みんみんファンドなどの資源提供システムの運用を支えると共に、情報発信支援と団体コンサルティングの武器として大きな成果を見せるようになりました。団体との信頼関係も大きくなっていると思います。せんだいCARESやCSR推進相談所をはじめとする企業との関わりもより広くより深くなりつつあります。コミュニティ政策支援やソーシャルビジネス支援なども他組織、他機関との連携による取り組みが進み、自治体からの依頼も増えています。緊急雇用などの一過性資金には手を出さず、苦しいけれどひたすら自主事業に力を注いできたことが、ようやく成果につながってきたのでしょう。ふと気づくと、スタッフの中にも中堅の担い手が育ち、責任感を持って組織運営と事業展開に貢献する人材が増えてきました。働く人たちが自分たちのキャリアにある程度確信を持って働けることができるようになったのだろうと思います。石の上にも三年と言いますが、なるほど諦めず地道に取り組むことが大切だと改めて思いました。

新しい年を迎えるにあたっても、センターの基本姿勢は変りません。ミッション達成のための3つの方針を堅持し、質の高い仕事を続けると共に、事業の相乗効果を高め、他組織との連携をより強化し、働くスタッフを大切にし、社内人材育成から地域人材育成の取り組みへと進化させ、社会的課題の緊急性重要性を重視した取り組みを行っていきます。世代交代やファンドの自立など、新しい展開も、その流れの中で自然に成就するものと確信しています。

「地域・テーマ公益ポータル・推進プロジェクト」全国会議

１１月８日(日)、東京日本財団ビルにて、IIHOE[人と組織と地球のための国際研究所]主催の「地域・テーマ公益ポータル・推進プロジェクト」全国会議が開催されました。

■地域・テーマ公益ポータルの開発とその活用法を考える

この会議は、「NPOに対する信頼を高めるための情報開示の質的向上と、NPOの持つ資源に対し、寄付・購入を促す『地域・テーマ公益ポータル』の開発とその活用推進」を目的に定期的に行われるものです。

1部では、岡山NPOセンター、京都NPOセンター、財)ふるさと島根定住財団、ソーシャル・デザイン・ファンド、当センターが、地域ポータルがどのように動いているのかを含めた進捗状況や取り組みを報告しました。また、オブザーバー参加者の(特活)日本NPOセンターと(特活)ハットウオンパクから情報開示を支えるそれぞれの動きや事業の状況などが伝えられました。

■地域の状況に合わせた、事業展開を

２部では、地域別での戦略会議を行い、来年度にかけての具体的な実施計画を考えました。各地域の中で定期的な集まりを持ち、認証の基準化や資金提供の枠組みを作る仕組み作りなど、今後の事業展開を検討しました。

日本財団公益ポータルサイト「CANPAN」としても、重点地域にフォーカスしたパートナーシップ強化や、サブポータル、テーマポータルの展開に向けて準備する予定だそうです。
最後に、NPOや市民活動団体、活動を必要とする個人や企業、行政にとっての最適な情報発信環境の整備と拡大を確認し、この会議を終えました。(伊藤浩子)

※公益ポータルとは：ＮＰＯの活動情報を中間支援組織が主体となって収集・発信することで、市民がNPOをサポートしたくなるような仕組みとしてのオンラインコミュニティです。また企業が実施しているCSR情報もあわせて掲載することにより、同じ地域や活動テーマによる、NPOと市民・企業や行政との新たな結びつきが生まれるきっかけを作ります。

らんち de MATCH♪ 第7回

今回は、行政と組んで地域活性化のための人材育成や、小・中学校で子どものキャリア教育を行っている特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク(※１)代表の伊勢みゆきさんと、コミュニティ再生の取組み支援や政策提言などを行っている、特定非営利活動法人まちづくり政策フォーラム(※２)代表の鈴木孝男さんのお二人をゲストにお招きしました。会場は仙台市役所を見下ろすレストラン。まちづくりを共通項にし、「らんちde MATCH♪」、スタートです。

―若い力を地域コミュニティに―

伊勢さんが提供くださったのは、青年層の地域参加の件。「日本は青年層がとても弱い、とよく耳にします。学生は頑張っているけれど、まさに社会の担い手の30代40代が弱い。欧米でそこがきちんと機能しているのも、行政の仕組みや支援体制が整っているから。日本では町内会でも青年層が不在なんです。そこが活発に地域に関われば、子育てや高齢化、福祉問題についても様々な対応策がとれる。特に男性が少ない気がしますが？」急に話題をふられたターゲット層の鈴木さん。う～ん、と言葉につまりながらも、「仕事に追われている年代なんですよね。企業はもっと理解しないといけない。若い力ということであれば、学生を活用する手もあるし。」それを聞いた紅邑常務理事が続けます。「イギリス視察の時、NPOで多くの若者が働いていることに驚きました。働いている理由は、学生の間に地域に関わる機会があったことと、学校を卒業してから企業に就職する間、インターンとして企業やNPOで働くという仕組みがあるから。そこでNPOの素晴らしさに気付き、そのままスタッフとして働き続ける人も少なくないんです。」若い力をいかに発掘、育成してNPOにつなげるか。それには整った仕組みが必要のようです。若い人を巻き込む仕組みとして、学生をインターンシップとして地域別に配置し、一定の期間の中で担当地域の課題を見つけ解決案を提案させる。鈴木さんはそんな構想をお持ちだとおっしゃいます。

―当たり前すぎて気がつかない？！―

「イギリスでは、生垣や羊を飼うフィールド、かやぶき民家といった昔ながらの農村風景は、どんどん維持が難しくなってきている。でも土地の人はその風景が当たり前すぎて関心がない。それに関心を持つのは土地の人ではなく、むしろロンドンのような都市部の人たち。その人たちに有料で伝統技術を提供し、農村の風景を守ってもらう。生活空間維持の担い手として、都市部の人の力を借りるという動きがあります。今、日本でも空き家の問題はすごく深刻なので、このイギリスの例は何かヒントになりそうだなと思ってるんです。倒れかけてる建物を修理するのって、ほとんどが人件費。だからそこを市民、企業、行政を含めて、ワークショップとか上手に人を巻き込む形で出来れば、修理にもなるし、まちづくりにもなりますよね。」イギリスのまちづくりを例に、鈴木さんがヒントを教えて下さいました。「現代人は職人技の良さに気付く人が少なくて、なり手が不足してますよね。」先日会津に視察に行かれた伊勢さんが続けます。「会津では、職人育成事業を行政主導で5年程度続けていたようですが、想定した若者ではなく、職人と同年代層が趣味として参加。結局人材育成という意味では上手くいかなかったんだそうです。」身近にあり過ぎて、その良さに気付けない。風景も技もいかに残していくかが課題のようです。

最後にお二人の今後を伺いました。キャリア教育も行う伊勢さんは、人と交わることにより、生き方に対する多様な考え方が出来るようになるので、そういった場を提供し続けたい、とのこと。鈴木さんは、人同士や資源をつなぐ支援や、人が移動できるシステムを構築し都会と農村部をつなぎたい、とおっしゃいます。弱いと話題に出た青年層にあたるお二人ですが、こんなお二人がいるのなら、心配は無用ですね。
(小川真美)

※１)https://canpan.info/open/dantai/00003052/dantai_detail.html　※２)http://www5a.biglobe.ne.jp/~machi-fo/index.html